

# 島根・トップコーチ

(第86号)平成22年7月28日

【発行】財団法人 島根県体育協会

【担当課】競技スポーツ課

〒690-0015

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

## 【第86号発刊にあたって】

第86号は、陸上競技の名指導者として、数々の名選手を育成し、偉大な業績を残された大熊喜三郎先生について、「大熊喜三郎先生を語る」と題して、金山滉氏(松江陸協理事長)と大野真理子氏(出雲工・監督)に執筆いただきました。

## 【プロフィール】

昭和4年2月3日生まれ

昭和25年3月31日大社小学校教諭

昭和28年5月1日県立松江高等学校教諭

昭和36年4月1日松江北高等学校教諭

昭和44年4月1日出雲高等学校教諭

昭和52年4月1日大田高等学校教諭

昭和54年4月1日松江工業高等学校教諭

昭和59年4月1日松江清心養護学校教諭

平成元年3月31日松江清心養護学校にて

定年退職

昭和54年1月~昭和59年12月

島根陸上競技協会理事長

昭和52年度 平沼亮三章 受章

昭和58年度 秩父宮章 受章

## 【大熊喜三郎先生の主な指導実績】

(全国大会入賞・高体連誌より)

松江高校・松江北高校

S29 (高校総体)原 陽堅(走幅跳・4位)

S30 (高校総体)原 陽堅(走幅跳・1位)

原 陽堅(三段跳・6位)

(国体)原 陽堅(走幅跳・6位)

有馬 鉄二(110JH・2位)

S32 (高校総体)山田 寧(三段跳・3位)

(国体)深田 伸夫(5000M・3位)

山田 寧(三段跳・3位)

山田 寧(走幅跳・4位)

S34 (高校総体)宮田 公爾(三段跳・5位)

S35 (高校総体)宮田 公爾(三段跳・2位)

(男子800MR・6位)

S36 (高校総体)門脇 弘晃(200H・3位)

S37 (高校総体)門脇 弘晃(200H・2位)

(国体)門脇 弘晃(200H・5位)

S39 (国体)岡 久夫(100M・3位)

S43 (高校総体)高橋 恵子(走幅跳・6位)

(国体)小笠原民子(100M・5位)

S44 (高校総体)小笠原民子(200M・5位)

川上 康男(110JH・5位)

(国体)小笠原民子(100M・5位)

(400MR・3位)

川上 康男(110JH・4位)

出雲高校

S50 (高校総体)岩成 真一(400M・6位)

松江工業高校

S54 (高校総体)山根 常郎(やり投・4位)

(国体)狩野 広行(走高跳・4位)

## 『大熊喜三郎先生を語る』

島根陸上競技協会審判部部長

松江市陸上競技協会理事長

金山 滉

「はじめに」

この度、大熊喜三郎先生について現役時代の指導方法、思い出等々についての原稿依頼があり、現在の私の立場上(松江高校・松江北高校陸上競技部 OB 会・三柳会会長)お引き受けしたものの、私の松江高校・松江北高校在学中の僅か 3 年間・1960 年～1963 年(昭和 35 年～38 年)で恩師大熊先生について語ることは如何したものかと思ひ悩みましたが、先生の在職中の思い出等について記した松江高校・松江北高校陸上競技部 50 年記念誌の先輩・後輩の大熊先生への思い出を併せご紹介することでこの責を果たしたいと思います。

「大熊先生の 16 年間」

先生は 1953 年(昭和 28 年)から 1969 年(昭和 44 年)まで松江高校・松江北高校に 16 年間勤務されております。着任当時には陸上部の顧問として兼折博先生がおられ既に全国大会入賞者を育てるなど強豪松江高校としてその名が知られておりました。この間、島根県大会はもとより中国大会は男子総合で 1953 年、55 年、57 年、60 年、61 年と 5 回の優勝を数え、全国大会(含む東西対抗)には毎年出場者があり、原陽堅(走幅跳)、有馬鉄二(110mJH)、宮田公爾(三段跳)の 3 人の優勝者をはじめ山田寧(三段跳)、小川優(800mR)、芦田昭充(800mR)、門脇弘晃(200mH)、岡久夫(100m)、高橋恵子(走幅跳)、川上康男(110mJH)、小笠原民子(200m)の 8 人の入賞者を出しておられます。当時は島根県大会の出場者を決める松江高校内の予選の順位が種目によってはそのまま島根県大会の決勝の順位になるほどのレベルの高い時代でした。

「当時の練習環境」

さて、当時の松江高校・松江北高校の強さの秘密はどこにあったのか。  
まず松江高校・松江北高校の隣に旧松江市営陸

上競技場(現在の総合体育館の辺り)があり常に無料で使用することができたこと。また、雨天練習場としてまた冬季練習の場として校舎の一部をつかっていたことがあげられると思います。雨天練習場とは松江高校・松江北高校の三棟の廊下のことで、廊下は直線約 80m の杉板張りで、適当な弾力があり、下半身に優しい走路、助走路として使用していました。二人並んでのスタット練習、ハドルを 5 台並べてのハドルリングの練習等々。時には床板を踏み抜くこともありましたが、慣れた手つきで木材と釘で修理したこと懐かしく思い出されます。冬季練習の一環のサキットレニングは机・椅子を片隅に片付けた教室を使ってやっていました。

また、補習授業に喧しいとクレームが付いた時も大熊先生は既得権を主張し補習授業の教室を変更させるなど、情熱的な一面も見せておられました。また、春休み、夏休み、冬休みになると先輩諸氏が中央の大学から帰省し、一緒に練習をし春、夏の 2 回の合宿で鍛えられるという OB と現役のつながりの非常に強い時代でした。

「指導方針・指導方法」

当時の大熊先生は毎日競技場に来て、あまりうるさいことも言わずに、絶えず選手の動きを見ておられました。後に先生はこう語っておられます。「自分は陸上は素人のような者だった。兼折先生の指導を受け自分なりに勉強はしたつもりだが自分には経験がなかった。そこへ先輩たちが指導に帰ってくる。生徒たちのレベルが高いからいろいろなものを吸収するのが早い。そういうことで自分は生徒たちのことを見ておって、聞かれたことをちょっと言うぐらいなこと、専門的な詳しいことはそれぞれの先輩が帰ってきて指導してもらえばいいというスタンスであった。」

## 8ミリカメラ

大熊先生の研究熱心さは8ミリカメラにもあらわれている。

試合当日の選手の競技中の様子を8ミリカメラで撮って、後日それを見ながら指導を受けた。当時の高校生で自分のフォームを見て練習の参考にしている高校はほとんど無かったのではないかと思う。これも後に次のように語っておられる。

「僕は素人だったでしょう。師範学校へ行って、教員を1年ほどやって、それから大学三年生、四年生をして、その時に佐藤不二男先生に「お前体が大きいから陸上競技をやれ」ということで陸上競技をした。教え子は中学校で3年やり、高校でも3年やっているから、はるかに生徒の方が上だった。自分は写真が好きだったから、何かいい方法はないかと考え、自分の姿を見せるのが一番いいということで、8ミリをはじめた。」

## 練習日誌

毎日記入し大熊先生の下へ提出する「練習日誌」の存在も忘れてはならないものだ。それについて昭和33年卒の山田寧氏は次のように記している。「その日誌には次のような項目があった。調子、疲労度、練習時間、練習内容、食欲、睡眠時間、睡眠度等であり、これを毎日丹念に5段階方式で記入していくものであった。ある大会で好記録が出たとする。次の大会のコンディション調整期間である7～10日間の各項目を前回のそれとまったく同様に実践すればすくなくとも前回の記録か、あるいはそれを上回る記録が期待できるはずである。日々の体調を数量化することなく、勘と経験にのみ頼るのであれば微妙な調子の変化に気づかないことが多い。「競技会に最高のコンディションで臨むにはどうしたら良い

か」この命題に見事解決を与えてくれた「練習日誌」。その後の私の競技生活にどれほど役立ったかはかりしれない。」

「おわりに」

以上、大熊先生について昔を思い出しながら、また先輩の思い出を引用しながら記してみた。競技場に先生の姿を見ない日はなかった。あまり多くを語らず黙ってわれわれ選手を見守ってくださった大熊先生。どこまでも謙虚な大熊先生。いつまでもお元気で。

## 出雲工業高校陸上競技部顧問

大野真理子

この度、体協より標題の件について執筆者の一人として原稿依頼がありお引き受けしました。

先生は松江高校・松江北高校に16年間勤務されましたが、私はその最後の2年間、高校1年生から2年生までを先生の指導のもとで過ごしました。本来ならば3年間習われた先輩方の方が適任と思うのですが、教え子として、またその後同業の道を歩ませてもらった者として、意を尽くせませんが、書いてみようと思います。

私は中学時代は運動部の経験はなく、高校入学後陸上競技部に入りましたので、私の今日に至るまでの陸上競技の原点はまさしく「大熊陸上」といっても過言ではありません。先生は細かい指示はされませんでした。常に見守られているという感じでした。「今日は確か職員会だから来られないだろう」と思って練習していると、いつの間にか来ておられたということもよくありました。

大会では8ミリカメラで競技を撮影し、それを現像処理してから後日「映写会」と称して指導を受けたことも思い出されます。今でこそビデオカメラで撮影し、フォーム分析に活かすのはどこでもやっていることですが、先生はその先駆けをしておられたということです。また当時練習計画をキャプテンが立て、それを先生にチェックしてもらった形式があったと思うのですが、だいたい走る本数など増やされていたようです。これなども、高卒後も競技を続ける人にとってはとてもいい勉強だったのではないのでしょうか。

トレーニング器具なども手作りのバーベルあり、ダンベルありで今から思うと随所に手をかけた工夫があったと思います。また生徒である私たちに対して、上からものをいうのではなく、なにかやる気にさせる暖かさのある助言をいただいていた。

以上こうして書いていると、それはそのまま今の指導者にも大切なポイントであることがわかります。まずは毎日グラウンドに立つことがいかに大切か、そしてそれが必ずなんらかの前進にきつとつながっていくと思います。

私は陸上競技部の顧問としては、現任高が6校目にあたるのですが、先生は教え子の教え子をよく見ておられ折々に感想やアドバイスをいただきました。

指導者という立場以外では、陸上競技の競技役員すなわち審判でもお世話になりました。見習うべきは、審判が手薄な時にはすぐにその部署へいき、いやな顔ひとつせず仕事をされるところです。県陸協の理事長までされた方が「どこが足りない？」とフットワークよく動かれるのを見ていると頭が下がります。

そんな、「私たちの誇るべき我が恩師」大熊先生。どうかいつまでもお元気で。

## 今月のことば

### 「守破離（しゅはり）」ということ

印象に残る教え子にU君というバレーボール部員がいました。チームメイトからの信頼も厚く、彼の練習に取り組む姿勢には人の心を動かす何かがありました。しかし身長に恵まれなかった為にレギュラーになること無く卒業していきました。彼は京都教育大に進みましたので、いつか島根の教師となって帰ってくることを私も楽しみにしていました。しかし、卒業後彼が選んだ道は陶芸の道でした。備前焼の有名な窯元へ修行に入り、6年間作陶の手ほどきを直接受けること無く雑務に追われたそうです。この間ひたすら師匠の技を盗むこと、本質をつかむこと、美的感覚と研究心を養うことに没頭し、夜遅く密かにロクロに向かい師匠の作陶を真似たと言います。

その後、彼は松江に帰り、自らの窯を開いて創作活動をしています。田部美術館奨励賞や日本伝統工芸展入賞などを獲得して彼の作陶の道にも、36才にして独自の作風が見えはじめ、高い評価を受けています。彼は備前焼の窯元で雑務に追われながらも師匠から何かを盗もうとしたあの頃が無かったら、今は無かったと述懐していました。

狂言・能・歌舞伎・茶道・華道などの伝統芸能や伝統工芸の修行の道標として使われる言葉に「守破離（しゅはり）」があります。「守」とは、徹底的に師匠から基本を学ぶ（真似ぶ）時期。「破」とは、基本の上にオリジナリティーを発揮する時期。「離」とは、師匠から離れて自らの流派を築く時期を言うそうです。

彼が窯元で師匠の技を盗んで作陶に励んだ時期、これが作陶で最も大切な美的感覚・研究心・創作意欲を培った「守」の時期であったと思います。

指導者にとっての「守」とは、私なりの解釈では、失敗を恐れないキャリアの浅い時期に沢山の成功した人々を求め歩き、エキスを盗み、「まねてみる」「やってみる」の実践を経て「理解」へたどり着く時期ではないでしょうか。

競技力向上統括アドバイザー  
荊尾 俊